



但馬水産技術センターだより



漁況情報（G2344号）

令和6年2月22日
兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

令和5年(2023年)漁期のあかいか(ソデイカ)漁況

今漁期（令和5年漁期）のあかいか（ソデイカ）の漁況と関連情報について、別紙資料のとおり取りまとめましたのでお知らせいたします。

お問い合わせ先：兵庫県但馬水産技術センター（担当：鈴木）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

email：nourinc_tajima@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ：https://www.hyogo-suigi.jp/tajima/

※ホームページではカラー版を掲載しています

令和5年漁期のあかいか(ソデイカ)漁業について

今漁期(令和5年漁期)のあかいか(ソデイカ)漁業について取りまとめましたのでお知らせします。

1 令和5年(2023年)漁期の漁況

県下全域の漁獲量(速報値)は、
合計 30.8 トン(前年は**38.7 トン**)で前年の79.6%、
 過去10年平均の28.4%でした(図1、表1)。

表1 県下各漁協(支所)の漁獲量(速報値)

	R5年(トン)	R4年(トン)	前年比(%)
但馬漁協津居山支所	5.1	4.8	106
但馬漁協竹野支所	2.2	2.9	74
但馬漁協柴山支所	3.7	5.3	70
但馬漁協香住支所	16.5	20.5	80
浜坂漁協	3.4	5.2	65
合計	30.8	38.7	80

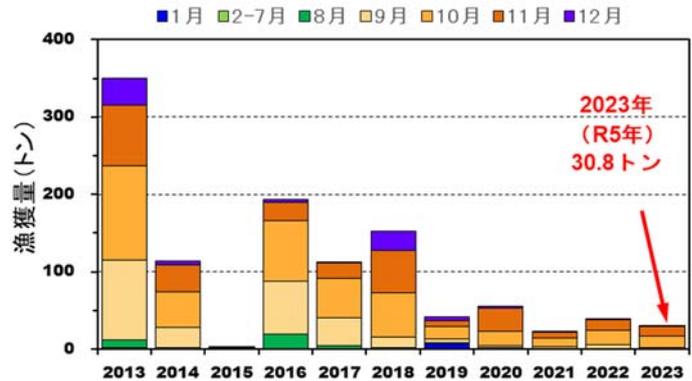


図1 あかいか(ソデイカ)漁獲量の推移(但馬全体)

2 価格の推移

県下全域の漁獲金額(速報値)は、**合計 4,010 万円**
(前年は 4,363 万円)で前年の92%でした。

1kgあたりの平均単価は、ほぼ漁獲がなかった8月は
 2,000円超でしたが、9月～12月は1,300円前後
 で推移しました(図2)。

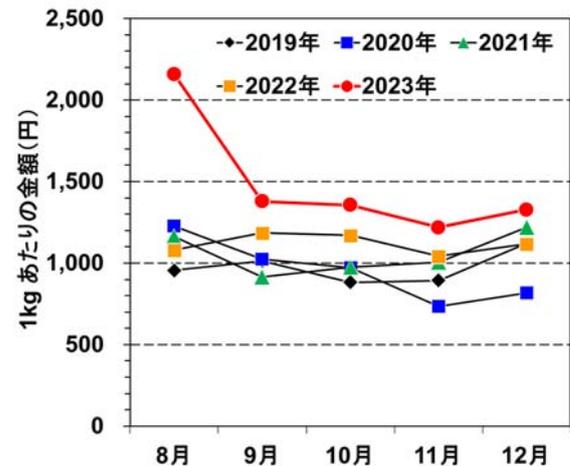


図2 あかいか(ソデイカ)平均単価の推移(但馬全体)

3 令和5年漁期の来遊量指標

来遊量指標としている但馬漁協香住支所の
 1日1隻あたりの平均漁獲量は12～132kg/日/隻
 で推移しました(図3)。

盛漁期(9～11月)の平均は83kg/日/隻で
 前年の89%、過去10年平均の69%でした。

今期も来遊が遅く本格的な操業は9月後半からとな
 りました。10月後半から11月前半はややまとまって
 漁獲される日もありましたが、平年と比べると短い漁
 期となりました。

測定データ数が少ないですが、10月上旬に胴長
 30cm台の小型サイズの主群がみられますが、10月中
 旬以降はこの群れが不明瞭となり、50cm台後半か
 ら60cm台後半が主体となりました。

漁模様がよい年は概ね主群が成長しながら漁期を
 通して主な漁獲対象となり、年によっては新たな群れ
 が加入して漁獲対象になりますが、今漁期は漁期を通し
 て幅広い漁獲サイズが見られるのが特徴でした。(図4)。

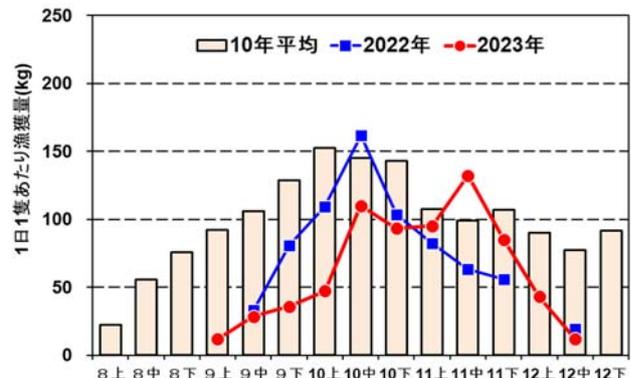
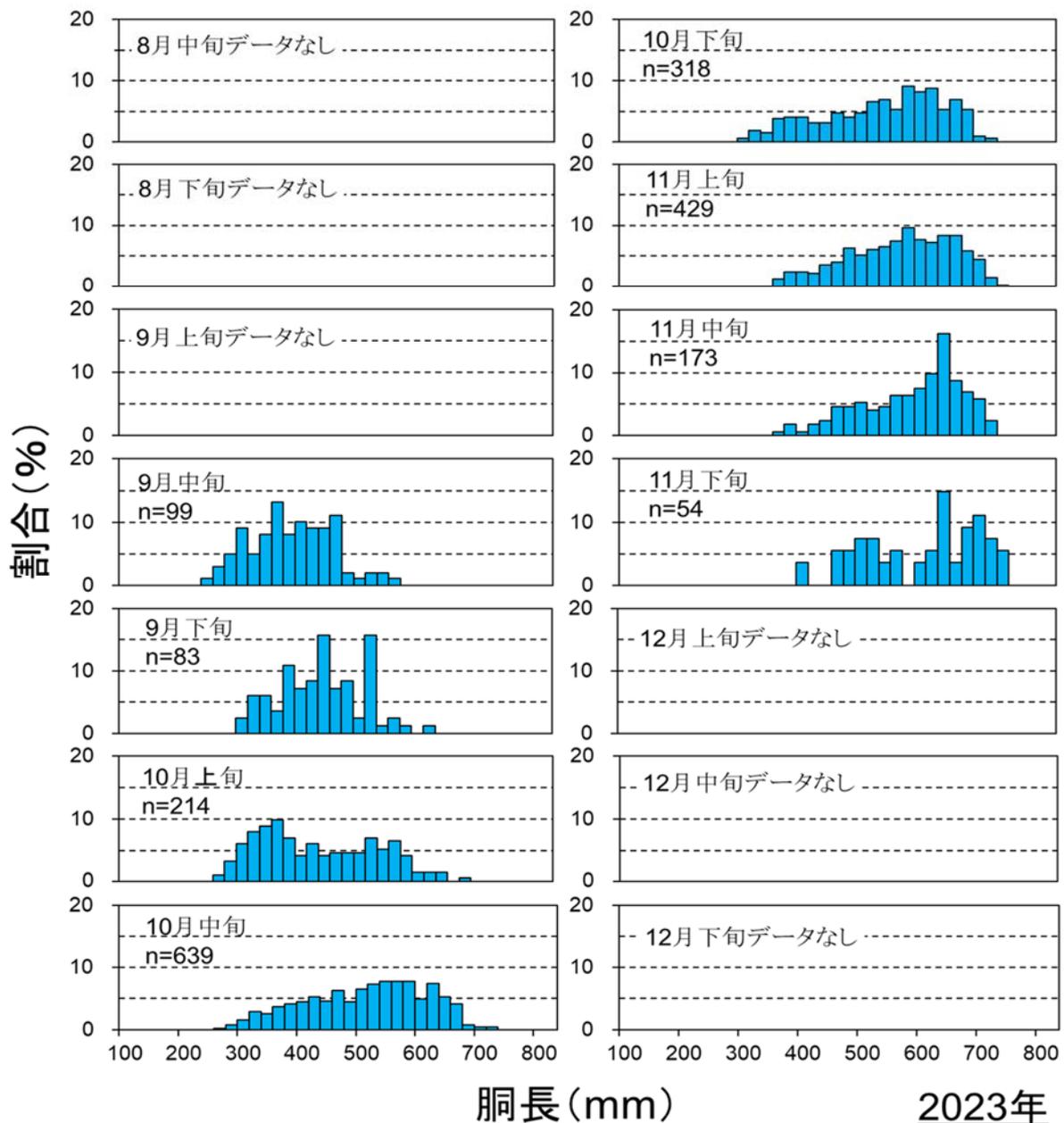


図3 あかいか(ソデイカ)来遊量指標の旬別推移



※nは各旬に測定したあかいか(ソデイカ)の数を示します。

図4 2023年漁期のJF 但馬香住支所に水揚げされたあかいか(ソデイカ)の体長組成

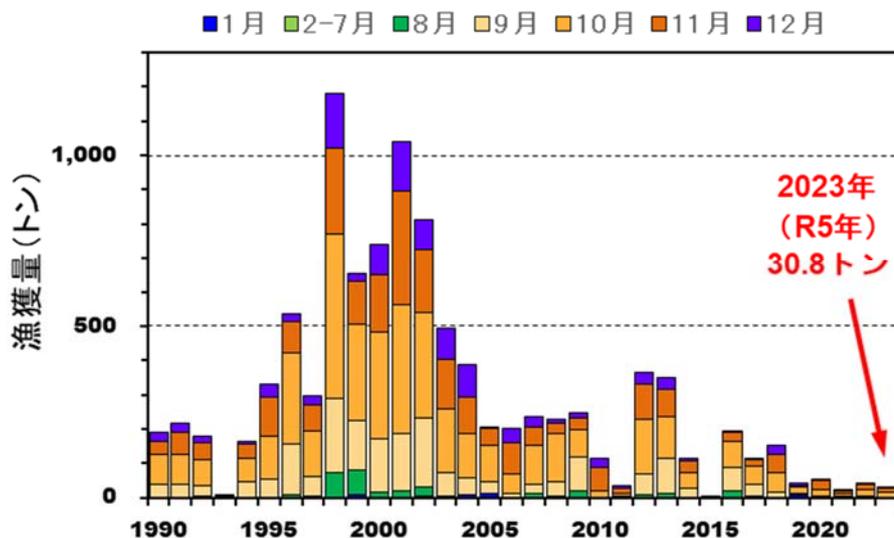


図1の補足図(1990年～2023年) あかいか(ソデイカ)漁獲量の推移(但馬全体)

4 今漁期の漁模様の要因について

① 沖縄県の漁況

日本海で漁獲されるソデイカは、2～3月を盛期とする1～9月に発生し、対馬暖流の上流部から成長しながら来遊してくる資源と考えられています。沖縄県の漁獲量と但馬の来遊水準とは必ずしも一致しませんが、沖縄県の過去10漁期で最も漁獲量が少なかった2010-2011年漁期（平成22年11月～平成23年6月；1,622トン）に対して、2011年の但馬も35トンと低迷した年がありました。

沖縄県の2022-2023年漁期（令和4年12月～令和5年5月）の漁獲量は、過去10漁期で2番目に少ない1,681トンであり、2023年の但馬も31トンと低迷しました。

（沖縄県漁獲量：出典 沖縄県水産海洋技術センター、<https://www.pref.okinawa.jp/fish/kenkyu/kankobutu/sodeika.html>）

② 冷夏/エルニーニョ現象

2015年はエルニーニョの影響による冷夏で、対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。また、1993年はエルニーニョ非発生年ですが記録的な冷夏であり、これにより対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。

気象庁の2023年の天候のまとめ（速報）では、日本の年平均気温及び日本近海の平均海面水温はいずれも統計開始以降最も高い値となる見込みであり、エルニーニョ現象は2023年の春から続いています。冷夏ではなく、その影響はなかったものと考えられます。

（2023年の天候のまとめ：出典 気象庁、https://www.jma.go.jp/jma/press/2312/22d/20231222_press_2023tenkomatome.html）

（エルニーニョ：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/el_nino/learning/faq/el_nino_table.html）

③ 対馬海峡の環境条件

ソデイカは南方から対馬海峡を通過して日本海へ来遊します。来遊時期と考えられる6月の対馬海峡部の環境条件（水温、潮位等）は、水温が高い、潮位が高い（対馬暖流の流量が多い）ほど来遊量が多い傾向があります。2023年6月の水温、潮位（長崎県対馬市巖原験潮所）ともにかなり高めでした。また、気象庁の「対馬暖流の勢力の時系列」から2023年6月以降の対馬暖流の勢力は、夏季に一時的に平年並みとなりましたが、その時期を除いて12月までは過去25年平均を大きく超えて推移していました。

これらのことから、日本海への来遊に対する対馬海峡の環境条件は好適であったと考えられます。

（験潮データ：出典 海上保安庁海洋情報部 https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN7/kencyo7/tokei_data/iz_tokei_dt.html）

（対馬暖流の勢力：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/tsushima/tsushima_area.html）

④ 水温分布

これまでの調査結果から但馬沖の好漁場は水深50mの水温が19℃以上、水深100mの水温が14～15℃以上の海域に形成されることが分かっています。但馬沖の水温分布に影響する冷水域は、9月中旬頃まで北緯38°以北を中心に分布していましたが、9月下旬以降は徐々に南下し、冷水域の張り出しも徐々に接岸傾向で推移しました。このことから10月後半以降はソデイカの分布は沖合へは広がりやすく、沿岸寄りであったと考えられます。

（水温分布：出典 水産教育研究機構、<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/public>）

⑤ その他

今漁期は対馬海峡の環境や但馬沖の水温分布の条件が揃っていたにもかかわらず漁獲量は低迷しました。漁模様には水温などの主要な条件のほかにも複数の要因が影響しますが、近年同様、今漁期も日本海への来遊量そのものが低調であったと推察されます。

ソデイカは南方からの来遊量の影響が大きい資源であり、但馬沖での来遊水準や漁獲量もその影響を大きく受けますが、2019年以降は低調な年が続いています。また、体長組成の推移や加入群の数も年ごとに傾向が大きく違ってきます。継続してデータを蓄積していくことが重要となりますので、今後も引き続き調査へのご協力をよろしくお願いいたします。